

翻訳 ジェームズ・フリーマン・クラーク 「仏教；言い換えれば東洋の プロテスタンティズム」

田 中 泰 賢

訳者前書き

先回はリディア・マリア・チャイルドの論考：「仏教とローマ・カトリックの類似性」（1870）を紹介した。今回はジェームズ・フリーマン・クラークの論考：「仏教；言い換えれば東洋のプロテスタンティズム」（1869）を紹介したい。これは題名にあるようにプロテスタントから見た仏教の考察及び比較である。この論考は『アトランティック・マンスリー』誌 (*Atlantic Monthly*) に1869年、掲載されている。それから135年後の2004年、再刊されて現代の私達も読むことが出来る。それが収録されている書物は *Buddhism in the United States, 1840-1925*、第1巻（全6巻）である。

ジェームズ・フリーマン・クラーク (James Freeman Clark, 1810-1888) はアメリカ北東部のニューハンプシャー州、ハノーバーに生まれた。この州の南東部の一部は大西洋に面し、北はカナダとの国境になっている。この州の港町、ポーツマスで1905年、日露戦争を終結させるためのポーツマス条約が締結されている。J. F. クラークはキリスト教プロテスタントの一派、ユニテリアンの牧師であった。従ってこの論考は一人のキリスト教徒の視点から仏教とキリスト教が論じられている。

クラークは又『ダイアル』(the *Dial*) という雑誌に「ジョージ・キーツ」(George Keats) と題する論考を投稿している。トーマス・ヒギンソンは興味深いことを述べている：『ダイアルに寄稿したクラークを始め、Ralph Waldo Emerson, A. Bronson Alcott, Theodore Parker, Henry Thoreau, George Ripley, Henry Hedge, W. H. Channing 達はアメリカ文学の本当の創設者であった。(The *Magnificent Activist*, 289) もちろん Margaret Fuller や E. P. Peabody といった女性たちも編集・出版に貢献した重要な文学者であった。

この最初の『ダイアル』誌は1840年から1844年まで発行された。超絶主義者達が投稿する貴重な場であった。尾形敏彦氏によると、超絶主義思想とは：個性尊重、盲目的なヨーロッパ崇拜の拒否、自我と自然との再発見、直観による神と人間との交渉の悟得などを唱える一種の浪漫的運動である。(『エマスンとソーロウの研究』256-257) ヒギンソンは「超絶主義者は1830年から1860年代の改革者の中で影響力のある勢力であった。」と述べている。(The *Magnificent Activist*, 11)

翻訳の内容、訳注について現在の仏教の学問的視点から疑問の点も見られるかもしれない。ご教示いただければ幸いです。紙数の都合上、この翻訳は後半部分を省略しました。Atlantic Monthly 誌を閲覧出来たのは愛知学院大学図書館及び関係の大学図書館の館員の皆さまのお陰です。誌上を借りてお礼申し上げます。

本文

広大で伝統のある仏陀の宗教を初めて知ると、この題目「東洋のプロテスタンティズム」は正確ではないと言いたくなるかもしれない。「むしろ東洋のローマ・カトリック教ではないか」と言うであろう。仏教のシステムの慣習とローマ・カトリック教会のそれらとの間には多くの類似性があるので、仏教の僧侶に出会ったカトリックの宣教師はうろたえてしまった。そして悪魔が自分達の聖なる儀式を真似していると誤解した。ポルトガルの宣教師、ペリー神父は剃髪した中国

人の仏教僧が仏像の前でひざまずき、数珠¹⁾を用いて、聞きなれない言葉で祈りをささげているのをじっくり見た時、驚いて叫び声をあげた「悪魔がこの国でローマのコートと同種類の服装、同じ聖職の行事、儀式を真似ている」。デイビス氏(英国アジア協会の議事録、II 491)は「仏教僧の禁欲生活、男性及び女性のそれぞれの共同体の僧堂生活、数珠、祈願の読経の作法、香、蠟燭」について話している。

メドハースト氏(中国、ロンドン、1857)は「天の女王」と呼ばれた乙女の像について述べている。この乙女は腕に幼児を抱き、十字架を持っている。罪の懺悔(さんげ)は必ず行われる。ハック神父はタール地方、チベット、中国各地での「旅の回想記」(ハズリットの翻訳)の中で次のように述べている：「十字架、かぶり物、衣(ころも)、外衣を大ラマ達は旅行の時、或いは寺院の外に於いて或る儀式を行う時に身につける。二重の聖歌隊の儀式、讚美歌、悪魔払いの儀式、希望する時には開けたり、閉めたりできる五つの鎖から吊るされる香炉、信者の頭の上にラマ僧が右手をさしだして行う祝禱、数珠、聖職者の禁欲、宗教的隠棲、聖者に対する崇拜、断食、行列して前進しつつ行う祈り、先唱者が唱える祈願に会衆が唱和する祈り、聖水、これら全ては仏教徒と我々との間にある類似点である。」

そしてチベットではダライ・ラマがいる。この人はある種の仏教の法王である。このように多くの際立つ類似性は説明するのが困難である。「悪魔が(キリスト教と仏教の宗教的儀式の類似に)大いに関係がある」という素朴な理論の後、イエズス会修道士達によって抱かれた意見は次のようなものであった：「仏教徒はこれらの習慣をネストリウス派の宣教師達から真似ている。この宣教師達は早くから中国にまで入り込んでいたことが知られている。」しかしこのようなジェズイット宣教師達の憶測に対する強い異議は「仏教は少なくともキリスト教より五百年以上古く、最も顕著な類似点の多くは最も早い時期に属する。」というものであった。次のようにウィルソン氏(ヒンズードラマ)は西暦紀元より前に書かれた演劇を翻訳した。その中で仏教

僧は托鉢修行者として姿を現す。

聖遺骨への崇拜はかなり古い。ファーガソン氏はインド、セイロン(現在スリランカ)、ビルマ(現在ミャンマー)、ジャワに存在する太古の聖遺骨のための仏塔或いは聖堂について述べている。これらの多くは偉大なる仏教徒、アショーカ王の時代に属する。この王は紀元前250年全インドを支配した。彼の統治下に於いて仏教はその国の宗教になった。三回目の結集(けつじゅう)²⁾が行われた。

古代の仏教建築は非常に優れており、大変美しい。仏教建築は仏塔、岩を掘り抜いた寺院、及び僧院から成っている。仏塔の幾つかは巨大な円柱状の物であって、40フィート(12.19メートル)の高さがある。それには装飾された柱頭がある。幾つかはレンガと石の巨大な丸屋根状の物であり、その中には聖なる遺品が収められている。仏陀の歯はかつてインドの壮大な聖堂に保護されていた。しかし紀元後311年セイロンに移された。セイロンでは依然として普遍的な崇敬の対象である。それは象牙か骨の一片で、2インチ(5.08センチ)の長さ、6個の箱に収められている。その最大のもは頑丈な銀色で5フィート(1.52メートル)の高さがある。他の箱にはルビーや宝石が嵌め込まれている。このほかにセイロンには「遺された聖なる鎖骨」が鐘形の仏塔に収められている。この塔は50フィート(15.24メートル)の高さである。この胸部の聖遺骨は紀元前250年インドの国王によって建てられた仏塔に安置されていた。その周りに二つの他の仏塔が後に建てられた。最後の物は80キュービット(34.5メートル或いは36.5メートル)の高さであった。インドで最も素晴らしいサンチーの仏塔は石材で作った堅固なドームである。直径106フィート(32.31メートル)、高さは42フィート(12.8メートル)である。地階とテラスがある。今は倒れているが、60本の柱廊からなり、豪華に彫刻された石の手すりと通路があった。

岩を掘って造った仏教寺院は非常に古く、インドにたくさんある。これらの遺跡をじきじきに研究したファーガソン氏によると、今もな

お900以上の遺跡が残っており、そのほとんどがボンベイ管区³⁾にあるという。これらの中で多くのものは紀元前2世紀にまでさかのぼる。様式ではそれらは最も初期のローマ・カトリック教会と非常に似ている。頑丈な岩を掘り抜いて作った寺院には身廊及び側廊があり、半円形の窪みの後陣で終わっている。その後陣の周りに通路が伸びている。カルレー⁴⁾という町にある一つはこのやり方で造られており、126フィート(38.40メートル)の長さで、45フィート(13.71メートル)の幅である。そしてそれぞれの側に華美に彫刻された15本の柱がある。それによって身廊と側廊が隔てられている。この仏教寺院の正面もまた豪華に飾られており、豪華で品位のある回廊或いは高廊の下の室内を明るくするために大きく開いた窓をもうけている。

インドにおいて岩を掘って造った仏教僧院は多い。打ち捨てられてから長い年月がたっているのだが、700年から800年の間、存在していたことが知られている。それらのほとんどは紀元前200年から紀元500年の間に僧院のために穴が掘り抜かれたものである。現在と同じように当時も仏教僧は禁欲、清貧、順守の3つの誓いをした。カトリックの修道会のメンバーもこれと同様の誓いをしている。これに加えて全ての仏教僧は托鉢をする。仏教僧は頭を剃り、衣(ころも)を着て、腰回りは縄で結びとめる。彼らは木製の応量器(おうりょうき；僧侶の用いる食器)を持って、家から家へ托鉢し、炊いたご飯をいただく。インドの古い僧院には僧たちのための礼拝堂(らいはいどう)と小さな独居室がある。最も大きな僧院でもせいぜい30人から40人の収容能力である。現在のチベットの一つの僧院で4千人のラマ僧が修行に専心している。これはフック宣教師(1813-1860)とガバー宣教師(1808-1853)がチベットのクンプムのラマ寺を訪ねた時の記録である。仏教僧のシステムは非常に古く、キリスト教を模倣したということは出来ないことをこれらの僧院の制度ははっきりと示している。

それではその逆は本当であろうか。カトリックのキリスト教徒は修

道院の規定等、鐘、数珠、剃髪、お香、司教冠、マント形の法衣、遺骨への崇拜、告白の慣習などは仏教徒から由来しているのだろうか。ヘンリー・トビー・プリンセプ (1792-1878) (チベット、タタール地方、モンゴル、1852) 及びクリスチャン・ラッセン (1800-1876) (インド考古学) の意見はそのようである。しかしこの意見に対してハードウィックは歴史上そのような影響の痕跡は見られないと反論している。もしかすると、その類似は共通の人間の傾向が別々に働いて同じ結果になったかもしれない。然しながら一方の宗教が他の宗教から模倣したと仮定する必要があるなら、仏教徒は古さに立脚して真正であることを主張するかもしれない。

しかしそうであったとしても次のような疑問が生じる。仏教とローマ・カトリック教会の形式的な特徴が似ているにも関わらず、何故仏教を東洋のプロテスタント教会と呼ぶのだろうか。

次のように答えよう。バラモン教とローマ・カトリック教、そして仏教のシステムとプロテスタント教会のより深く、より本質的な関係があるから。アジアで人間の理性が経験され、その後ヨーロッパで同じような経験が繰り返された。人類のためにそれは聖職者のカーストの抑圧に異議を申し立てた。バラモン教はローマ・カトリックの教会のように聖なる修道会の支配力を持って聖礼典の救いを確立した。仏教はプロテスタント教会のように反抗し、個人の人格に基づいて個人の救済の教義を確立した。バラモン教はローマ・カトリック教会のように懺悔と殉教を称えて、排他的な心霊論を教え、肉体を魂の敵と考える。しかし仏教とプロテスタント教会は万物 (nature) 及び万物の法則を受け入れ、帰依の宗教のみならず人類の宗教を創った。このような大まかな表現には常に多くの例外が見られるかもしれない。しかしこれらは大きな輪郭としての特色である。

ローマ・カトリック教会とバラモン教会は犠牲的行為をその本質に置く。それぞれが著しく犠牲的なシステムである。ミサの日々の犠牲的行為はカトリック・教会の中心的な特徴である。そんなふうにバラ

モン教会も犠牲的行為のシステムである。しかしプロテスタント教会と仏教は教えによって魂を救う。ローマ・カトリック教会では説教はミサより重要度が低い。プロテスタント教会と仏教では説教は主要な手段であり、それによって魂が救われる。バラモン教会は硬直したカーストのシステムである。その聖職者のカーストは区別され、最高権威とされる。ローマ・カトリック教会では聖職者がほとんど教会に等しい。仏教とプロテスタント教会では信徒が権利を取り戻している。従って仏教の儀式とローマ・カトリック教会の儀礼が外面的に似ていても、内面的な類似性は仏教とプロテスタント教会にある。

アジアの仏教はヨーロッパのプロテスタント教会のように霊に反対して本質を掲げ、カーストに反対して人間性を掲げ、教団の独裁制に反対して個人の自由を掲げ、秘跡による救いに反対して信仰による救いを掲げる。全ての反抗がうまくいく傾向があるように、仏教も同様である。霊の独裁的な権威の乱用に反対して、本質の真相を主張する仏教は神をたてない。仏教には被造物も造物主もない。仏教の聖歌では「世界が起こるのは自然界の事実である。」「その発生と消滅は自ずと本来的である。」「世界が発生し滅びるのは自然である。」と唱える。バラモン教では絶対的な霊が唯一の実体であり、この世界は幻想であるのに対して、仏教徒はこの世界のみを知っており、永遠の世界は全く知られないものであり、取るに足りないものである。しかしどんなに徹底的であろうと、どんな反抗も全ての前例を廃することはない。すなわち仏教も時の栄枯盛衰から永遠という絶対の安息に逃避するバラモン教と同じ目的を持つ。彼らは存在の対象に関して同じ考えである。そこに到達する方法に関しては意見を異にする。バラモン教徒とローマ・カトリック教徒は永遠の安息は知的な服従によって、また我々に教えられる事及び我々のために他人によってなされることを無抵抗に受け入れることによって手に入ると考えている。仏教徒とプロテスタントは神聖な法則を理性的、かつ自由に受け入れることによって成就されると考えている。ネパールで仏教を長年にわたって研

究してきたホジソン(1800-1894)は「仏教の絶対に正しいひとつの特徴は人間の知性の無限なる理解力を信じていることである」と述べている。仏陀の名前は理性的な人、或いは広く目覚めた人を意味する。ここにおいても自由な思考と真理を追究することに価値を強調するプロテスタント教会との類似性が見られる。

ユダヤ教では二種類の霊的な権力者が見られる。一つは預言者で、もう一つは聖職者である。聖職者は赦免し、神の愛を大事にする機関である。預言者は真理を導く機関である。ヨーロッパの宗教改革では、聖職者に対して反抗した預言者がプロテスト教会を起こした。アジアの宗教改革では、預言者は仏教を起こした。遂にバラモン教とローマ・カトリック教会はより信仰的で、仏教とプロテスタント教会はより倫理的、精神的となる。このように大まかな輪郭を述べると、このエッセイの題名が正しいことがわかる。しかし東洋と西洋の宗教的儀式の間の類似性を更に見ていくことによって、その正確さの確信を持ちたい。

これらは主に仏教徒とローマ・カトリック教会の修道会の類似点である。現在ではそれは事実である。しかし十分に言及されていないことがある。それはローマ・カトリックの全体的な修道院のシステムがその教会の本質的な考えと全く異なる原則に基づいていることである。ローマ・カトリックの根本的な教義は秘跡による救いである。これだけが「教会の聖体拝領を離れて救いは無い」という訓言を正当化するものである。洗礼の秘跡は霊をよみがえらせる。告解の秘跡はその大罪を清める。聖体拝領の秘跡はその命を復活させる。叙階の秘跡は聖職者がこれら及び他の秘跡を授けることを認める。しかしもし霊が充分に施され、拝領した秘跡によって救われるならば、何故霊を救うために宗教的会に入るのだろうか。何故敬虔、自制、世間からの離脱という行為によって、教会の普通の秘跡で得られるものを求めようとするのか。私達がこの問題を調べれば調べるほど、ローマ・カトリック教会の全体の修道院システムが一つの包含されたプロテスタン

(8)

ト主義であり、教会内のプロテスタント主義であることが分ってくる。

宗教改革以前の改革者の多くは僧であった。サボナロー、聖バーナード、ルター自身は僧であった。修道院から多くの宗教改革の指導者が出た。ローマ・カトリック教会のプロテスタントの要素は何世紀にもわたって修道院では締め出され、その大きな組織体に含まれる不調和な要素が異物として存続した。一つの弾丸、或いは異物が体内に入る時、生命力が働き始め、その周りに小さな壁を作り、それをささぎる。カトリック教徒達が単に秘跡の救いに満足しなくなり、より高尚な生活にあこがれる時、教会は彼らを修道院に行かせて、自活させる。そこでは彼らは害を与えないから。歴史の奇妙な一致の一つはアジアの社会的行事の経過がヨーロッパで繰り返されることである。仏教は何世紀もの間インドにおいて同じ仕方で許容された。仏教はバラモン教が含み、インドの宗教の一部になっている僧院制度を取り入れている。危機が到来し衝突が始まると、インドのプロテスタント(仏教)はインドにおいて長い間自らを守った。それは丁度ルター主義がイタリア、スペイン、オーストリアで永続したように。しかし仏教は遂に誕生の地、インドから追い払われた。それは丁度プロテスタント主義がイタリア、スペインから追い払われたように。今や仏塔、寺院、僧院の廃墟が残っているのみである。バラモン教の真ただ中であって仏教の勢力が如何に広大であったかを示している。

インドから放逐され、アーリア人種を統制し続けることは出来なかったが、仏教は力強い布教の本領を發揮している。モンゴル人種の大多数の国々が仏教に帰依している。ほぼ3億人の人々が仏教徒である。(ここでの統計は当て推量にすぎない)

若干の当て推量がある：

アレクサンダー・カニンガム著 『ビルサ・トープス』

キリスト教徒 2億7千万人

仏教徒 2億2千2百万人

ハッセル著 『ペニー 百科事典』

キリスト教徒	1億2千万人
ユダヤ教徒	4百万人
マホメット教徒	2億5千2百万人
バラモン教徒	1億1千万人
仏教徒	3億1千5百万人

ジョンストン著 『自然界の地図帳』

キリスト教徒	3億百万人
ユダヤ教徒	5百万人
バラモン教徒	1億3千3百万人
マホメット教徒	1億1千万人
仏教徒	2億4千5百万人

パーキンス著 『ジョンソンのアメリカの地図帳』

キリスト教徒	3億6千9百万人
マホメット教徒	1億6千万人
ユダヤ教徒	6百万人
仏教徒	3億2千万人

『新アメリカ百科事典』

仏教徒	2億9千万人
-----	--------

仏教は中国では民間に普及している宗教である。チベットやビルマ帝国（ミャンマー）では国の宗教になっている。仏教は日本、シヤム（タイ）、アンナン（ベトナム）、ネパール、セイロン（スリランカ）の宗教である。つまるところ東アジアのほぼ全域に及んでいる。

この巨大な宗教に関して、最近まで私達（アメリカ人）は知識を得る手段をほとんど持っていなかった。しかし最近25年間非常に多数

の資料がもたらされている。現在私達は仏教の最初の状況及びその後発展していった事実に基づいて仏教を学ぶことが出来る。仏教の聖典はセイロン、ネパール、中国、チベットにおいてそれぞれ独自に護持されている。G. ターナー氏、ジョージリー氏、R. スペンス・ハーディ氏はセイロンで護持されているパーリ語の仏教聖典、すなわち経、律、論の三蔵に関して最高の大家である。ホジソン氏はネパールのサンスクリット語の仏教聖典を収集し、研究している。1825年に彼はベンガルのアジア協会にサンスクリット語の60の仏教書及びチベット語の250の仏教書を送っている。ハンガリアの医師、スソマ氏はチベットの仏教僧院で膨大な量の仏教聖典に出くわしている。それらはサンスクリット語から翻訳された聖典である。さきほどのホジソン氏も最近そのサンスクリット語の聖典を調べていることは上述した通りである。シュミット氏はモンゴル語の仏教聖典に出くわしている。中国語の高名な研究家、スタニスラス・ジュリエン氏は中国語から仏教に関する書物を翻訳している。それらは紀元76年にさかのぼる。

最近では北インドの岩、円柱、及び他の遺跡に刻まれた碑文が書き写され、翻訳されている。ジェームズ・プリンセプ氏はこれらの碑文を解読した。仏教が最初に現れたマガダ国の古代の言語であることがわかった。碑文にはピヤダシという名前の王の布告もある。前に言及したターナー氏は有名なアショーカ王と同一人物であることを示している。アレキサンダー大王の時代、紀元前325年にこの王は即位しているようである。類似した碑文がインド全体にわたって見られる。それらによってビュルヌフ、プリンセプ、ターナー、ラッセン、ウェーバー、マックス・ミュラー、聖ヒレールといった学者は紀元前4世紀には仏教はインドのほぼ国家的な宗教であったということを受け入れた。

これらの豊富な資料によって、仏教の起源と特質を調べてみよう。中央インド及びアウド王国の北、ネパール国境に近いところに、紀元前7世紀の末、賢く、立派な王がいた。首都はカピラヴァストウで

あった。彼は偉大なる太陽族の末裔の一人であった。太陽族はインドの叙事詩で褒めたたえられている。王の妃は非常に美しかったのでマーヤーと呼ばれた。シッダルタ王子の母である。王子は後に仏陀として知られる。王子が生まれて7日後に母が亡くなり、シッダルタは母方の叔母に育てられた。若い王子は人格においても、知性においても抜きんできていたのみならず、早くから敬虔な心の持ち主として頭角を現した。バラモン教の最も初期の時代において、信心深い行為を求める人々が隠者になり、森の中で一人で暮らし、祈り、瞑想、節制、及びヴェーダの学習に励むことは珍しいことではなかったことがマヌ法典から明らかである。

然しながらこの修行はバラモンに制限されていたようである。王にとって息子が青春の盛りに、心も体も王にふさわしい才能を仕込まれているのにもかかわらず、隠者の生活に心を向けているのは深い悲しみであった。実際若いシッダルタ、人類の偉大なる指導者は生まれてから何時も深い経験をしてきたようだ。世界の悪魔達は彼の心や頭脳を苦しめてきた。まさにその様子は死ぬべき運命ばかり考えていた。あらゆる物が消滅した。永続する物はあるのだろうか。不変の物はあるだろうか。真理のみである。完全無欠で、永遠の事物の法則のみである。「長く続く平和を人類に与えたい。私は人々の解放者になろう。」と彼は言った。父や妻や友人達の懇願に反して、彼は或る夜、宮殿を去って行った。王子という地位を捨てて托鉢の修行者になった。「神聖な法の見解に達し、仏陀になるまで私は宮殿に戻ることはない。」と彼は言った。

彼は最初にバラモン僧達の所を訪ねた。彼らの教義を聞いたが、そこに満足出来るものは見いだされなかった。彼らの中で最も博学な人達でさえも彼に本当の平和を教えることはできなかった。それは深遠な心の安心であり、彼は既にそれをニルバーナと呼んでいた。彼は29歳であった。彼は五感を抑制するために、バラモン教の苦行を6年間行ったが、結果として否認した。完全（悟り）への道はそのよう

な苦行には無いことを納得した。従って彼は以前の食事を再び始め、より苦痛のない生活様式を行った。そのため彼の驚くばかりの苦行に魅惑されていた多くの弟子が去って行った。彼は一人で修行の生活をした。遂にしっかりとした確信に達した。決して揺らぐことのない事物の法の体験であった。それが彼にとって本当に自由な生活の土台になった。1週間絶え間なく坐禅を続けた後、彼は遂に至福の洞察力(直観力)を得た。そこはインドで最も聖なる場所の一つになっている。彼は木の下に座り、顔を東に向け、日夜動かなかった。人類の苦悩を救う三重の科学的知識⁵⁾を勝ち得た。仏陀が亡くなって二百年後、一人の中国人の巡礼者はこの聖なる木に関して伝わっていることを教えられた。それは高いレンガの壁で囲まれており、東は開いていた。その近くには多数の仏塔や僧院があった。聖ヒレール氏によると、これらの遺跡、及び木の位置はいずれ再発見されるかもしれない。全体から見てそこは二千四百年の間、計り知れないほど多くの人々にとって幸福と進歩の源であるという運動が始まってから求められるに値する場所である。

この洞察力(直観力)について確信したので、仏陀はその真理を世の人々に伝えることを決意した。それが彼に何をもちよるかよく知っていた。つまり、妨害、侮辱、無視、軽蔑を受けることであった。しかし彼は三つの階級の人々のことを思い出した。この人々は既に真理への途上であって、彼を必要としなかった。この人々は思い違いに捕らわれており、どうにも出来なかった。貧しく、信じかねている人々は彼らの生き方に自信が無かった。仏陀が伝えようとしたのはこの信じかねている最下位の人々を救うためであった。インドの聖なる都市、ベナレスに行く途上、ガンジス河で困ったことが生じた。そこを渡るための代金を船頭に払うお金が無かった。ベナレスで初めて「転法輪」を説き、仏陀の教えを理解する人々が出たのである。彼の説法は仏教聖典に入っている。父(シュッドーダナ王)を始めとして多くの人々が彼に帰依した。しかしインドの筆写者、独善家、指導的なバ

ラモン僧達から激しい抵抗を味わった。80歳で亡くなるまで、彼はそのように生き、伝え続けた。

この先覚者が死ぬとたちまち万人にとって尊い存在となった。遺体は火葬に付された。残った遺骨をめぐって争いが生じた。結局遺骨は八つに分けられた。それぞれの遺骨を幸運にも保持した人達がそれぞれ仏塔を建てた。何故ならばそのような素晴らしい聖なる遺骨がその人に帰属したので。北部と南部の古代の書物は仏塔が建てられた場所に関して意見が一致している。ローマ・カトリックの遺品は信頼性が証明できない。仏陀はイエスと同様に肉体は何の益ももたらさず、言葉は心と生命であると信じた。この偶像崇拝を咎めたのはおそらく仏陀が最初であろう。しかし呪物崇拝は最も純粋な宗教からなかなか消え去らない。

仏陀が亡くなった時⁶⁾は大抵の東洋の生没年の様に定かでない。チベットやネパール等の北部の仏教徒はお互いかなり異なる。中国の仏教徒はもっと不確かである。大多数の学者と同様にラッセンは南部、特にセイロンの全ての権威者が同意している紀元前543年を信頼出来る時期として受け入れている。最近ウェスターガードはそれに関する論文を書いている。その中で詳しく推論して、時期を200年遅らせている。彼が兄弟である学者達を確信させるかどうかはわからない。

釈迦牟尼仏陀が亡くなってすぐ彼の最も優れた弟子たちの全体会議が招集された。会衆の教義と戒律を定めるためであった。伝説によると弟子から3人が選ばれ、仏陀が教えたことを記憶をもとに朗唱した。最初の弟子は戒律について仏陀の教えを朗唱するよう指名された。彼らは「戒律は法の根本原理であるから」と言った。そこでウパーリは演壇に上がり、倫理と儀式に関する全ての戒律を復唱した。次にアナンダが選ばれ、信仰と教義に関する師(仏陀)の説話を行った。最後にカーシャパがシステムの原理と形而上学を告げた。会議は7カ月間開かれた。仏教聖典の三部門が彼らの仕事の結果となった。

釈迦牟尼仏陀自身は何も書き残していないから。仏陀は会話によってのみ教えた。

2 番目の会議が招集された。忍び寄る悪弊を正すためであった。仏陀の死後百年ほど経った頃それが行われた。僧達の強い友愛会は僧院の戒律を緩やかにすることを提案した。それによって食事、酒類、金や銀の施し物があれば、それを受け取る大きな自由が許された。教会分離の罪を犯す僧は罷免された。その数は一万人に及んだ。彼らは新しい宗派を結成した。第3回目の会議が招集された。偉大なる仏教徒、アショーカ王の治世の時であった。異説を唱える人達のためであった。その数六万人に及び、罷免され、追放された。この後、布教師達は様々な所で教えを伝えた。これらの布教師達の名前や成果は『マハワンソー』(聖史)に記録されている。ジョージ・ターナー氏がシンハラ語から翻訳している。注目すべきことはそれらの中の幾つかの遺物が最近サンチー仏塔や他の聖なる建物で発見されている。小箱に収められ、そこに名前が刻まれている。刻まれた名前はセイロンの歴史書の中の同じ布教師と対応する。

例えば『マハワンソー』によれば、二人の布教師、一人はカサボ(或いはカーシャバ)、もう一人はマジマ(或いはマドフマ)はヒマラヤ山脈の地域に伝道に行っている。彼らは一緒に旅をし、伝道し、病气などで苦しみ、こつこつと働いた。古代の歴史書は5世紀にセイロンで構成された歴史を伝えているが、研究の助けによってもっと古い時代も明らかになっている。今1851年に二番目のサンチー仏塔がメジャー・カニンガムによって公開された時、これらの布教師の遺物が発見された。1819年にキャプテン・フェルが訪ねた時、仏塔は完璧で、「一つの石も崩れていなかった」。その後1822年、素人の遺物をあさる人達によって傷つけられたが、中身はそのままである。それはしっかりとした半球体である。モルタルなしの粗い石で建てられ、直径39フィート(11.88メートル)である。地階は6フィート(1.82メートル)の高さで、周りは5フィート(1.52メートル)突き出して、テ

ラスになっている。

この仏塔の中央には一つの小さな部屋があり、六つの石で出来ている。そこには白い砂岩で出来た10平方インチ(25.4平方センチ)ほどの遺物箱が含まれている。四つの磁器の小箱(仏教徒の間では聖なる石)がそこにある。それぞれに火葬された人間の少しばかりの遺骨がある。これらの箱の一つの蓋の外側にこのような碑文がある:「伝統にとらわれず、自由なカーシャパ・ゴットラ、全ヘマワインタへの布教師」。その蓋の内側には「伝統にとらわれず、自由なマドフヤマの遺物」と刻まれている。仏教教会の8人の他の指導者達と共にこれらの遺物はアショーカ王時代からこの塔にある。紀元前220年よりも後に推定することは出来ない。

仏教によって発揮された伝道精神はキリスト教以前のどの宗教とも異なる。儒教は中国の外で改宗させようとはしなかった。バラモン教はインドの域を越えなかった。ゾロアスター教のシステムはペルシャの宗教であった。エジプトのシステムはナイル河流域に限定されていた。ギリシャのシステムはギリシャ人に限られていた。しかし仏教は全ての人々に原理の知識を伝えようとする願いで燃え立った。その熱烈で成功した布教師達によってネパール、チベット、ビルマ、セイロン、中国、タイ、日本において多くの人々が仏教に帰依した。これら全ての国々において僧院は今日も人々にとって知識の主たる拠り所であり、教育の中心である。このような一つの宗教を人を卑しくさせる迷信と同類とみなすのはつまらないことである。その力は教師達を駆り立てる強い確信を宿している。間違った信仰ではなく、きっと正しい見解から来たものであろう。

それなら仏教の教義は何であるか。仏陀と弟子達の本質的な教えは何であるか。私達がしばしば聞いているように仏教は神や不死を否定するシステムなのか。無神論は東洋において人々の心を支配しているのだろうか。アジア人の精神は永遠の死に好意を持っているのだろうか。明らかにしてみよう。

私達が見てきたように釈迦牟尼仏は二つの深い確信——絶え間なく変化する災い及び永続していく或る価値あるものの可能性——から出家した。彼は伝道の書の言葉を使ったかもしれない。「空の空。全ては空である。」この素晴らしい書物の深淵は仏陀と同じ一連の思索に基づいている。あらゆる物は循環してぐるぐると回っている。太陽の下、新しい物はなく、太陽は昇り、そして沈み、再び昇る。風は東西南北に吹き、回路に従ってまた戻ってくる。何処に安心が見出されるのか。何処に平和が。何処に確実性が。シッダルタは若かった。しかし彼は迫り来る老年に気付いていた。彼は健康であった。しかし病氣や死が手近に来ている事を知っていた。生育と衰え、生と死、喜びと悲哀の止むことのない繰り返しの光景から彼は逃れることは出来なかった。彼は不変不動で、真に価値あるものを求めて心の底から叫んだ。

再び変化や衰亡からの解脱は知識に見いだされると彼は確信した。しかし彼は知識によって外面的な事実の理解や記憶を意図しなかった。覚えることでもなかった。思索的な知識や推理の力をもくろむことでもなかった。直観的知識、永遠の真理の理解、宇宙の変わらない法則の認識を意味した。これは単に知的な方法によって得られるものではなく、倫理的訓練と純正な心と生活によるものである。従って彼は世を捨て、森に入り、隠者になった。

しかしこの点において彼はバラモンと袂を分かたず。バラモンは苦行、拒絶、難行の有用さを信じていた(いる)。バラモンは若いころに彼らの隠者を受け入れた。しかし彼らは功德を積むものとして難行の有用さを信じた。彼らはそれ自体のために自己否定を実践した。仏陀はそれをより高い目的——解脱、純正、直観の手段として修行した。仏陀はこの目的を達成すると信じた。遂に仏陀は真理を見た。仏陀は「完全に悟った」。迷いは消え去った。真実性(客観性)が彼の前にあった。彼は誰でも知っている仏陀であった。

やはり彼は人間であり、神ではなかった⁷⁾。ここでさらにバラモン

教に背反する点がある。バラモン教のシステムでは信仰の究極は神に没頭するようになることである。バラモン教の教義は神を讃えることに没頭することである。仏教徒の教義は人間の成長にある。バラモン教のシステムでは神は最も大切なものである。仏教徒においては人間が最も大切であり、神ではない。ここには無神論が見られ、神を忘れる程に人間を重視する。それは恐らく「神のない世界」である。しかし神を否定しない。それは三界の教義を受け入れる。一つは絶対的存在の永遠の世界。二つ目は神々、梵天、インドラ、ヴィシュヌ、シヴァの天上界。三つ目は有限の世界。その世界は個々の人間、自然の法則から成っている。絶対的存在の世界、ニルヴァーナ（涅槃）を私達は知らない。従ってそれは私達にとって無いようなものである。天界、神々の世界は私達にはあまり重要でない。私達が知っているのは永久に続く自然の法則である。それに従って私達は生じ、滅していく。その自然の法則に完全に従うことによって、私達はようやくニルヴァーナ（涅槃）を得て、永遠に安らぐのである。

仏陀の心には二つの存在界から成る。一つは生き物であり、もう一つは法である。仏陀は無数の虫、動物、人間達における感情を見た。そして生き物は曲げられない法——自然の法によって取り巻かれていることも見た。これらを知ること及びそれらに従うことが解脱である。

仏教の根本的な教義は四つの崇高な真理である。これは仏陀及びビルマ、チベット、中国等の北から南の全ての仏教徒によって例外なく説かれている。

1. 全ての存在は不運である。何故ならば全ての存在は変化と死に従属しているから。
2. この不運の原因は変化し、滅亡していくものへの欲望である。
3. この欲望、その結果として起こる不運は不可避ではない。欲望と不運が完全に止む時、私達はニルヴァーナ（涅槃）に到達することが出来る。

4. そのための不動の方法がある。それを怠慢なく修行することによって目的を達成できる。

これら四つの真理はシステムの基本である。一つは不運。二つ目は原因。三つ目は原因を除去すること。四つ目は除去する（涅槃に達すること）方法。

この方法には八つのステップがある。

1. 正見。正しい理解。正しい信条。
2. 正思。正しい思考。正しい意見。生活への信頼という賢い適用。
3. 正語。正しい言葉。私達が話したり、行ったりする全てにおける完全な誠実さ。
4. 正業。正しい行為。正しい目的。常にふさわしい目的を目指す。
5. 正命。正しい生活。正しい活動。罪を伴わない社会生活。
6. 正精進。正しい努力。正しい孝順と支配。義務の実直な遵守。
7. 正念。正しい注意。正しい記憶。過去の行為について適切な回想。
8. 正定。正しい精神集中。正しい坐禅。不変の真理に対して心を不動にする。

この教義のシステムに続いて倫理的抑制と禁制が来る。つまり全ての人々に適用される5つの戒。更に僧尼及び僧にだけ適用される戒である。最初の禁制は次の通りである。

1. 不殺生戒。生き物を殺さない。
2. 不偷盜戒。盗みをしない。
3. 不妄語戒。うそをつかない。
4. 不邪淫戒。夫又は妻以外の異性と関係しない。
5. 不飲酒戒。酒を飲まない。

僧だけの戒は次の通りである。

1. 不非時食戒。正午以後には食事は取らない。

2. 不歌舞観聴戒。舞踊、声楽、器楽、見世物を観聴しない。
3. 不塗飾香鬘戒。花環、香料、塗油、飾り物などをつけない。
4. 不坐高广大牀戒。高い大きなベッドを用いない。
5. 不蓄金銀宝戒。金銀などを受けない。

これら全ての教義や戒は多数の注解や解説の主題になっている。あらゆることが注釈され、解説され、明らかにされる。イエス一団の神父たちの決議論と同様の大部のシステム、聖トマスの偉大な神学大全の綿密な分析と同様な神学のシステムがチベットやセイロンの僧院の図書館で見られる。僧達は偉業と不思議な事で満ちあふれた聖人伝集、聖人達の言行録を持っている。形而上学の巨大な組織が少しの法規と悔悟というわかりやすい基礎の上に生じている。この印刷物の大半は啓発的で、面白い。その幾つかは深い洞察力を持っている。グノーシス派の複雑な思弁について重要な研究をしたバウアーは仏教の巨大な抽象的概念とそれらを比較している。

私達がこのシステムをじっくりと考える時、やはり二つの事実が現れてくる。まずその合理性。二つ目はその慈愛性である。それは限なく人間の理性に訴える。それはこれから先ではなく、現在の地獄から人を救う事を提案する。それは教えることによって人を救おうとする。影響力を持つ大きな手段は法話である。仏陀は数え切れないほどの法話を行った。彼の伝道師達は外国に行って伝道した。仏教は人間の心に理性的な訴えをすることによって見事に克服したのである。それは国王の支援があっても、武力によって広めなかった。他のどんな宗教よりも多くの帰依者を出している仏教とキリスト教は征服者の剣に頼らず、理性でもって公平な理性の論争で勝利を獲得したのは確かに人類史上励みになる事実である。

確かに仏教には迷信や間違いはある。しかしそれは人を欺いてはいないし、人を虐げてもない。この点において仏教はキリスト教徒に一つの教訓を与えている。仏教は他の宗教を告白している人々に対して毛嫌いをしない。仏教徒は異端審問所を設けていない。仏教徒は世

界を仏の国にする熱意と我々西洋の経験では不可解な寛容さを結合している。一回だけの宗教戦争が彼らの2300年の平和な歴史に影を落としている。それはチベットで起きたが、詳細はわからない。あるタイ人がクロフォードに世界の全ての宗教は本当の宗教の分枝であると思っていると語った。セイロンのある仏教徒は彼の息子を基督教の学校に行かせた。彼は驚いた宣教師に「私は基督教を仏教と同様に尊敬しています。だから基督教は仏教を支援するものとみなしています。」と語った。M. M. ユクとガベットはタタールとチベットにおいて一人の仏教徒も（基督教に）改宗出来なかった。しかし彼らは或る仏教徒に、良き基督教徒であり、同時に良き仏教徒であると言わしめたのは部分的な改宗に成功したと言えよう。

仏教は又慈愛の宗教である。仏教は理性に重点を置くので、全ての人間に敬意を払う。全ての人間は同じ資質を持っていると考える。出発点において仏教は排他的階級制度を打破している。どんな身分であろうと、全ての人が聖職に就くことが出来る。全ての人間に対して無限の慈悲心を持ち、全てに対して犠牲を払う義務感がある。ある伝説によると、仏陀は飢えた雌の虎に自身の体を捧げたとされている。その雌の虎は弱って自分の子に乳を飲ませることが出来なかったのである。ヨハネ伝の第4章に珍しくそれと似たような出来事が述べられている。修道者が身分の低い女性に水を求めた話である。その女性が驚いた様子をした時、「私に水を下さい。そうすれば、あなたに真理を教えよう」と修道士は言ったのである。無条件の命令「汝殺すなかれ」。これは全ての人に適用されるが、モンゴル人の態度を優しくするのに大きな影響を与えている。この命令は靈魂輪廻の教義とつながっている。この靈魂輪廻はバラモン教のみならず仏教の本質的な教義の一つである。

しかし仏教は人身御供、それにまた流血をとまなう捧げものを廃している。清浄な仏壇は花や葉で飾られているのみである。仏教は又良いい行為から成る実践的な慈愛をじゅんじゅんと説き聞かせる。全ての

僧侶は毎日の(托鉢による)施し物によって支えられている。見知らぬ人に対して温かく迎えるのが仏教徒の務めである。病人、貧しい人、病気の動物にいたるまで、病院(及び慈善施設)を設けたり、緑陰となる木を植えたり、旅行者のための家を建てたりするのが仏教徒の務めである。

バプテスト宣教師のマルコム氏が語ったところによると、ビルマのある小さな村の旅行者のための家、ザヤートで、ほとんど座らないで休んでいたら、或る女性が横になるための素晴らしいマットを持ってきてくれた。もう一人のビルマ人は程よく冷たい水を運んできてくれた。一人の男性は6個ほどの良いオレンジを摘んできてくれた。誰一人として少しの報酬も要求もせず、期待もしていなかった。彼らは姿をくらまして、彼が休息出来るように配慮した。更に彼はこう述べている：「ビルマの船頭達の勇氣、技術、活力、気前の良さに触れなければ誰も川をさかのぼることはできない。落ち着きと品行の点で、ビルマの船頭達ははるかに西洋の船頭達より優れている。ビルマでの種々の旅行において、喧嘩やとげとげしい言葉を聞いたことがない⁸⁾。」

マルコム氏はまた次のように述べている。「ビルマの人達の多くは以前には白人に出会ったことが無い。しかし彼らの礼儀正しさに強い印象を受ける。彼らは決してどんなほめかしもしないし、迷惑なことをせきたてもしない。もし私が彼らに私の時計やペンシルケース、或いは特に彼らを引き付ける何かを見せても、周囲の人達は超然として、自分の順番が来るのを待っている、といった光景が多々見られる。」

「ビルマでは酔いをもたらす酒がヤシの汁から容易に造られるけれど、人々の不節制を見たことが無い。」

「人はビルマ王国の端から端まで人々(にかかる費用)だけでなく、食事も宿泊もお金なしで旅をすることが出来る。」

「私が見る限りでは、数千人の人々が協力して、広く知られた式典

を熱心にお祝いし、暴力や酔狂もなかった。」

「この国に住んでいた間、男性或いは女性の下品な行為、或いは不謹慎なしぐさを見ることはなかった。私は何百人もの男性及び女性の水浴びを見たが、不謹慎な行為、或いは軽率な行為は見なかった。」

「子供達は母親のみならず、父親からも大変な思いやりをもって遇される。父親は仕事が無い時は子供を腕に抱いて、喜んでこどもの世話をする。その間母親はお米を脱穀したりする。また夫のそばで何することもなく座っていることもある。父親が男の子と同じように女の子をかわいがるのをしばしば見た。男の子や女の子を持っている未亡人は子供が無い人に比べてより多く結婚を求められるように思われる。」

「子供達は中国人達とほぼ同じ様に両親に対して敬虔である。年配者は非常な配慮と優しさで扱われ、全ての集会において最上の場所を占める。」

聖ヒレールの意見では、仏教の徳行は行動、活力、事業よりも長期の我慢、短期の辛抱、服従、禁欲のひとつである。全ての存在への愛は仏教の核心である。すべての動物は私達の出来得る限りの身内である。敵を愛すること、動物のために私達の命を差し出すこと、防衛戦でさえも避けること、自制すること、犯罪を避けること、年上の人に従順になること、老人を敬うこと、人や動物のために食べ物や宿を提供すること、井戸を掘り、植物を植えること、どんな宗教も軽蔑しないこと、不寛容を表に出さないこと、いじめないことは仏教徒の徳である。複婚制は許容される。一夫一婦婚制はセイロン、タイ、ビルマで一般的である。チベットやモンゴルでは幾分少ない。女性は他の東洋の宗教よりより良く扱われる。

しかし仏教の宗教的生活とは何か。神無しで宗教が成り立つのか。もし仏教が神を持たなければ、仏教はどのように崇拝、祈り、信仰を持つのか。仏教がそれら全てを有することは疑いない。仏教文化はローマ・カトリックの文化と似たところが多い。しかし在俗司祭はい

ないということに関してカトリックとは異なる。正規の僧のみである。全ての聖職者が僧侶である。彼らは貧困、貞節、遵守の三つを誓う。然しながら彼らの制約は変更出来ないことは無い。もし彼らが天職を間違えていると思ったら、黄衣を手放して、還俗出来る。

仏教の神は仏陀自身であり、あがめられる人である。仏陀は涅槃に入ることによって無限の存在になる。祈りが仏陀に呼びかけられる。人が祈ることはごく道理にかなったことなので、どんな意見もその人が祈りをするのを止めることはできない。チベットでは祈りの集会は通りでさえも行われる。ハック氏は「ラサには感動的な慣習がある。日没少し前の夕暮れ、人々は仕事を止めて、通りや広場に集まる。すべての人々がひざまずき、低く音楽的な口調でお祈りを唱える。たくさんの集会からわきあがる歌のような協和音は広大なそして、厳粛な調和をもたらす。それは深く心に染み入る。私達は人々が共に祈る仏教徒と、十字を切っているのを見られて赤面するヨーロッパの国々と比較して、悲しまざるを得ないのである。」と述べている。

チベットでは懺悔（さんげ）は昔から課されていた。そこでの一般のお祈りは集まった僧侶達の前での厳粛な懺悔（さんげ）である。それは全ての罪を許していく。それは罪の率直な懺悔（さんげ）であり、再び罪を犯さないという約束でもある。聖水は仏塔の供養に使用される。

釈迦牟尼に先行する35人の仏陀がおり、罪を除去する重要な存在である。これらの仏陀は「35人の懺悔（さんげ）の仏陀」と呼ばれる。然しながら、釈迦牟尼もこれらの仏陀に含まれている。何人かのラマ僧も35人の仏陀が描かれている聖画に入っている。例えばツォンカパ。このラマ僧は紀元1555年に生まれている。托鉢僧は一月月に2回、新月と満月に懺悔（さんげ）することが義務づけられている。

仏教徒はまた女性のための尼僧院がある。釈迦牟尼は彼の叔母及び信頼している弟子のアナンダの熱心な要請を受けて尼僧院を設立する

ことに同意したと伝えられている。尼僧は男性の僧侶と同様の誓願をする。彼らの規則では最も若い僧侶に対しても畏敬の念を示すことが求められる。又僧侶に対して怒りの言葉やとげとげしい言葉を使わないように求められる。尼僧は学ぶことをいとわない。尼僧はこの目的のために有徳な指導者のもとで2週間学ぶ。尼僧は一度に2週間以上にわたって精神的な隠遁生活にふけてはならない。尼僧は単に慰めのために出かけてはならない。2年間の準備の後、尼僧は正式な手続きを経て僧になり、雨安居（梅雨の時、修行すること）の閉会式に出席する。

訳注

- 1) 中村元氏によればこのお数珠（じゅず）はインドから西洋にもたらされたものである。西洋ではロザリオ（rosary）という。その由来について中村氏は次のように語っている「サンスクリットでお数珠のことをジャバ・マラー（japa・mālā）といいます。ジャバとは念誦のことでマラーというのは輪です。もとはバラモンが右手に持って神の名を唱えながら一つずつ爪繰（つまぐ）ったのです。それが西洋に入って“数珠つまぐ”（to tell beads）というような言葉が出来ています。ジャバとは念誦ですが、それがジャパーとなるとバラのことになるのです。アラビア人か西洋人かがお数珠を見てこれは何だと聞いたのですね。その時、ジャパーはバラだ、マラーは輪だといったのです。これからロザリオ（rosary）という言葉ができたのです。」（中村元「禅の世界思想史的位置づけ」『禅の世界』（其弘堂書店、1976）、363-64頁参照。
- 2) 結集とは釈尊の教えをまとめ集めること。聖典を編集すること。釈尊の入滅後、異論を止め、教団の統一を維持するために代表者を集め、遺教の合誦を行ったことをいう。第一回結集。マハーカーシャパ（摩訶迦葉）が会議を招集し、五百人の有能な比丘がラージャグリハ（王舎城）郊外の七葉窟で、ウパーリ（優婆離）が律の、アーナンダ（阿難）が経の主任となり、読誦する本文を検討し、教団の名において編集決定された。第二回結集。釈尊滅後百年のころ、戒律について異論が生じたので、ヴァイシャーリ（毘舍離）でヤシャス（耶舎）が主任となり、七百人が集まって律藏が編集されたと伝えられている。第三回結集。仏滅後二百年のころ、アショーカ王のもとで、首都パータリプトラ（華氏城）において、モッガリプッタ・ティッサ（目犍連帝須）が主任となり、千人の比丘が集まって、

- 経・律・論蔵全部を集成したという。第一・二回は北方・南方の両仏教に伝えるが、第三回は南方仏教にのみ伝えている。(中村元『仏教語大辞典』上巻、抜粋)
- 3) 現在ムンバイ；英国のインド統治初期に設けられた3つの行政区画(Bengal, Bombay, Madras)の一つ。
 - 4) インド中央西部。プネー(東のシリコンバレー、インドのオックスフォードと呼ばれる都市)から北西50キロの所にある。このカルレー(Karla)という町は紀元前1世紀に掘られた石窟仏教寺院で有名である。
 - 5) 四諦(四つの真理)・八正道・中道の3つの事を指すのか。「後世南方仏教では「四つの真理」と「無我」とがベナレスにおいてなされた主要な説法であると解せられた。ところが北方の仏伝では中道、四諦、5つの集まりに関する無常・苦・空・無我・12因縁を説いたとし、さらに弥勒(みろく)などの諸菩薩に一切諸法の本性が寂靜不生不滅であることなどを説いたとしているが、これらの諸項は後のものほど年代的にも逐次後世になって付加されたものだと考えられる」(中村元『ゴータマ・ブッダー―釈尊伝―』法蔵館、昭和61(1986)、134-137頁)
 - 6) 中村元氏は仏陀の誕生及び入滅について次のように述べている：「学者によって約百年の差異があるわけであるが、しかしインドの古代史の年代について僅かに百年の差しかないということは、年代の不明な古代インドとしては驚くべきことである。」(中村元『ゴータマ・ブッダー―釈尊の生涯―』中村元選集第11巻、春秋社、昭和63(1988)、48-52頁)
 - 7) 水野弘元氏は次のように述べている：釈尊自身も、これ(四つの真理)は常人にはとうてい理解されえないから、むしろこれを説くことを放棄しようとして決意されたけれども、仏伝によれば、梵天という神が釈尊の前に現れて、現在世人は無明(無知)の闇におおわれて、苦しみ悩み、輪廻に沈湎している。ゆえに世尊は、どうかその教えを説いて、世人を指導救済してもらいたい。この教えはむずかしくて、容易に理解しえられないかもしれないけれども、世の中にはそれを理解する人もあるであろうし、またそれを平易に説いてもらえば、多くの人々がその教えを奉じ苦悩を脱することができるでありましょう、と懇願したとせられる。そこでようやく釈尊は、これを世人に説く決意をしたとせられる。(水野弘元『釈尊の生涯』春秋社、1971、87-88頁)
 - 8) 片山一良氏が釈尊の説かれた仏典の一つ『ダンマパダ』を現代日本語に翻訳・解説しておられる。その幾つかを紹介しよう：「怒りを捨てよ、慢を捨て去れ あらゆる縛りを脱するがよい 名(みょう)と色(しき)とに執着しない 無一物者(むいちもつしゃ)に苦は従わず(法句 221)」「怒りを離れて怒りに勝つべし 善をそなえて不善に勝つべし 施しによ

り 吝嗇(りんしょく)に勝つべし 真実により妄語者(もうごしゃ)に勝つべし(法句223)」「賢者は身がよく制御され 語がよく制御されている 賢者は意もよく制御され 実によく制御されている(法句234)」(片山一良『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版、2009、301-313頁)

引用文献

[一次資料]

Clarke, James Freeman, “Buddhism; or, The Protestantism of the East,” *Atlantic Monthly* 23 (June 1869): 713-728.

[二次資料]

片山一良『ダンマパダ *Dhammapada* 全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』：大蔵出版、2009。(平成21)

Meyer, Howard N., ed. *The Magnificent Activist The Writings of Thomas Wentworth Higginson (1823-1911)*: Da Capo Press, 2000.

水野弘元『釈尊の生涯』：春秋社、1971。(昭和46)

尾形敏彦『エマスンとソーロウの研究』：風間書房、1980。(昭和55)

中村元『仏教語大辞典』上巻：東京書籍、1975。(昭和50)

中村元「禅の世界思想史的位置づけ」『禅の世界』：其弘堂書店、1976。(昭和51)

中村元『ゴータマ・ブッダ—釈尊伝—』：法蔵館、1986。(昭和61)

中村元『ゴータマ・ブッダ—釈尊の生涯— 原始仏教1』中村元選集第11巻：春秋社、1988。(昭和63)

参考文献

Buddhism in the United States, 1840-1925: Volume 1: Ganesha Publishing / Edition Synapse, 2004.

The Dial A Magazine for Literature, Philosophy, and Religion. Volume III 1853. Boston : Published by E. P. Peabody. Tokyo: Hon-no-tomosha, 1999.